

## 第4回「『論語』の名句（二）」

\*\*\*

学びと思考と。

使用漢字によるニュアンスの違い。

講義

加地伸行

「論語指導士」養成講座 第4回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

株式会社フジテレビ KIDS 東京都港区台場 2-4-8

「論語の名句」の第二回です。今回も優れた名句についてお話しします。

名句を通じて、中国の文章の特色も学んでいただければと思います。

そこで今回は、今後、中国の古い時代の文章である漢文を読むときの参考として、いくつかの句を選びました。

最初は有名なことばです。

「子曰く、<sup>しいわ</sup>学<sup>まな</sup>びて思<sup>おも</sup>わざれば、<sup>すなわ</sup>則<sup>くら</sup>ち罔<sup>おも</sup>し。思<sup>おも</sup>いて学<sup>まな</sup>ばざれば、<sup>すなわ</sup>則<sup>あや</sup>ち殆<sup>あや</sup>うし」（為政第二）

「罔し」は難しい字ですが、暗い、日が差さない、と考えていただいて結構です。

『論語』は孔子の話を中心に編集されています。その頃、文字は書くことが中心ではありませんでした。なぜなら文房具（筆記具）のようなものがなかったからです。

当時は竹や木をけずって板にしたようなものを書く、彫るという方法で記録していました。

それも重要な場合のみです。

大半は暗唱です。話は暗唱で言い伝えられ、覚えていくということが主流でした。孔子の学校においてもそうでした。暗誦にも拘わらず、孔子と学生との話は意外と詳しく残っています。

それは皆がしっかりと暗唱したからです。

今では暗唱に重きを置かれておりませんが、かつては暗唱が中心です。細かいことまで、意外なほど、よく覚えました。それを記録に残していった、今日のような本となりました。

しかし暗唱するとなると、覚えやすい形でないとなんか覚えにくい。ずらずらと並べられますと、覚える方も大変です。ですから、教える方は相手がしっかり理解しやすいように、口調の良い言い方をすることが多いのです。口調がよろしいと聞いている方も覚えやすい。そこにリズムがあると一層覚えやすいですね。

この文を見てください。

「子曰く、<sup>しいわ</sup>学<sup>まな</sup>びて思<sup>おも</sup>わざれば、<sup>すなわ</sup>則<sup>くら</sup>ち罔<sup>おも</sup>し。思<sup>おも</sup>いて学<sup>まな</sup>ばざれば、<sup>すなわ</sup>則<sup>あや</sup>ち殆<sup>あや</sup>うし」

これは全部が対句になっています。「学びて思わざれば」、そして「思いて学ばざれば」。

逆になっています。これは理解しやすい。孔子は意図的にこういう言い方をしたのだと思います。

本当なら最初の一文で終わりです。あえて、その反対まで述べています。

それは対句にする気持ち、ペアにする気持ちが強いからです。

今の私たちにとっても、この文は対句であるため、なんとなく覚えやすいように感じますね。

「則ち罔し」の「則ち」という漢字、これは今後も出てきますので説明します。

「きっと、こうなる」というニュアンスです。強い調子での「きつとこういう結果になるぞ」という意識です。

「即座に」の「即」もすなわちと読みますが、これは「ただちに」という意味です。

この句の解釈は、「学んで」つまり知識をたくさん集めて、「思わざれば」しかし考えることをしなければ、「則ち罔し」あれこれ覚えているだけで、これから先、何をしたらいいかわからない、見えない。つまり暗い。

逆に「思いて学ばざれば」考えるばかりで、知識のストックがない。考えたことだけが世界のすべてと思いきおわけですから、「則ち殆うし」独断的になりやすいぞ、危ないぞ。勉強しなさいということです。

形を学ぶにあたっては、まず対句、対になっているものの言い方を、このような句で学ぶのがいいでしょう。

古い中国語ですので、ルールがあります。それを基本として、学んで読まれると、この名句が生きてくると思います。

なぜ名句か。

これは、今日にも当てはまることばだからではないでしょうか。

これから6年後に大学の入学試験は大きく変わります。それは、これまでのように偏差値ばかりを大事にしてきた知識の集積型ではなく、ものを考える人間を判定できる試験にしなければ、という流れです。今はその中身を試行錯誤しているところです。

学ぶばかりで思っていないじゃないか。思うことを中心に置くべきという意見です。今はこの意見ばかりです。

そこで、この名句の出番です。思うばかりでも危ないわけですから。両方をバランス良くしなければならぬのです。

確かに知識偏重の風潮も事実です。考えることに注目しようということはよろしい。

しかし知識と思考と、どちらかに偏ってはいけません。そういうことではないでしょうか。

次の句です。

「子曰く、<sup>し</sup>知<sup>ち</sup>者<sup>しゃ</sup>は<sup>ま</sup>惑<sup>ど</sup>わず、<sup>じ</sup>仁<sup>ん</sup>者<sup>しゃ</sup>は<sup>う</sup>憂<sup>れ</sup>えず、<sup>ゆう</sup>勇<sup>し</sup>者<sup>しゃ</sup>は<sup>お</sup>懼<sup>そ</sup>れず」（郷党第十）

これも漢文、古い中国の文章の特徴が出ています。「知者」「仁者」「勇者」という三つの形。対句と言えど対句ですが、それ以上のものがあります。それぞれの「者」の場合を並べています。孔子の学校で目指そうとした人物像が全部出ています。それぞれの特徴を比較して表しています。わかりやすい例です。中国の文章にはこういうものが多くあります。

さて、今回は<sup>ろう</sup>「勞」という文字に、いろいろな意味があることをお伝えしましたが、今回は<sup>おそ</sup>「懼れず」の「懼」という文字に関してお話しします。

「おそれる」といっても、いろいろなニュアンスの「おそれる」があります。覚えなさいというものではありません。一つの例です。

「<sup>きょう</sup>恐」本来は、先のことが気がかりという意味。現在、日本では、どんな「おそれ」もほとんどこの文字を使っています。

「<sup>く</sup>懼」びくびくする。

「<sup>い</sup>畏」謹慎する。

「<sup>ふ</sup>怖」他者に驚かされる。

「<sup>しょう</sup>懼」臆病で少しのことでもおののく。

「<sup>しょう</sup>悚・<sup>しょう</sup>竦」身をすくめる。

「<sup>しょう</sup>摺」おそれて、気が動転する。

「<sup>こう</sup>惶」おそれて、何をしたらいいかわからない。おののく。

「<sup>はく</sup>怕」これは「恐」と同じですが、口語体であり、あらゆる「おそる」を表す。現代の中国人はこの文字を使うことが多い。現代の日本は「恐」一字で、どの場合にも使っていることが多い。日本でも中国でも、現代では簡単になっていますね。

それでは一つ目の句に戻ります。

「学ぶ」の意味を、さきほどは「知識」と言いました。

この句ではそれでいいのですが、しかし『論語』において、「学ぶ」は本来、道徳的倫理的なことを学ぶということが中心です。

今回の名句における「学ぶ」はやや限定的です。

前回の「勞」、今回の「おそれる」と、漢字にはいろいろな意味合いがあることと申しました。

世の中にはたくさんの立派な辞書があります。どれも素晴らしい。しかし、量の多い辞書、重い辞書は、あまり実用的でないと思いますので、いくつか推薦します。

辞書は、たくさん持っていて意味はありません。使うのは一つ。愛用すると生きてきます。

・三省堂『全訳漢辞海』

そこで引かれている原典を訳しています。基本的なことをきちんと書いているところがいいと思います。

・角川書店『新字源』

この辞書の特色は、ことばを元来の意味を中心に訳しているところです。漢字は、へたをすると日本語的な意味合いにずれてしまいます。これはもともとの意味を記載しています。中国の、ある辞書を翻訳する形をとっていますので、中国人の理解する感覚に近いものです。

日本人が普段使っているような意味合いに解釈している辞書があります。これは危ない。

本来の意味での解釈を掲載している辞書を手元に置かれてご覧になったらいいと思います。